

ジェンドリンの暗在性の哲学における 「感じられた意味」の機能的意義 —デューイの「経験」の感情的側面を手掛かりに—

古井戸 祐 樹

はじめに

本稿では、ユージン・ジェンドリン (Eugene Gendlin, 1926-2017) が主張する言語化に先立つ前概念的で暗黙な「体験過程 (experiencing)」及び、「感じられた意味 (felt meaning)」の機能的観点に着目し、この二つの概念が、ジョン・デューイ (John Dewey, 1859-1952) の経験主義、特に「経験」の構成における「感じ (feeling)」の側面に与えている影響を考察する。研究方法として、ジェンドリンが引用するデューイの『思考の方法』(1933)における「示唆 (suggestion)」と「反省 (reflection)」を題材にしながら、従来のデューイの「経験」の構成条件と異なる視座があることを明らかにする。具体的には、言語化や概念化に先立つ次元で、「感じられた意味」を起因に意味生成が発生し、デューイが示した従来の反省的思考の過程とは別様に、経験が構成されている過程を示す。この「体感過程」と「感じられた意味」の機能的観点から、経験を再分析することを通して、思考の過程で、新規的な意味の発見と創造の生起が同時進行的に起こることを明らかにする。

これまでのジェンドリンに関する研究は、臨床心理学の観点や彼の開発した、「フォーカシング指向心理療法 (focusing-oriented psychotherapy)」(以下「フォーカシング」と略記)を中心に多くの業績が培われてきた。その一方で、近年ジェンドリンの哲学的観点が、田中秀男、三村尚彦、マーク・ジョンソン (Jhonson, Mark.) らを中心に、徐々に明らかになり始めている。田中は、ジェンドリンの「体験過程」は、デイルタイの「体験 (Erleben)」を発展させているとして、ジェンドリンの修士論文である「ウィルヘルム・デイルタイと人間科学における人の重要性の把握に関する問題 ("Wilhelm Dilthey and the problem of comprehending human significance in the science of man")」(以下 Master's thesis なので「Mt.」と略記する)を検討し、ジェンドリンの「体験過程」の起源を臨床心理学ではなく、哲学の文脈から明らかにしている⁽¹⁾。同様に、三村は『体験を問いつける哲学 第1巻—初期ジェンドリン哲学と体験過程理論—』において、デイルタイとジェンドリンの関係を踏まえ、現象学的側面に触れつつ「体験過程」と「感じられた意味」の極めて丁寧に詳細な考察を行っている⁽²⁾。またジョンソンは、ジェンドリンの哲学が、デューイの経験主義を発展させ、美的経験における質的側面を精密に捉えることができるとする主張を展開している⁽³⁾。

このようにジェンドリンの「暗在性の哲学 (philosophy of the implicit)」の成立については、臨床

心理学の観点だけではなく、19世紀の精神科学に関する「生の哲学」を展開した、デイルタイ、フッサール現象学、アメリカのプラグマティズムを含みながら成立している。しかしながら、本研究で着目する「体験過程」と「感じられた意味」を踏まえ、デューイの「経験」概念に関する考察をした研究は、管見の限り見あたらない。それ故本稿では、まず、従来の「体験」と「経験」といった概念とジェンドリンの用語がどのような関係にあるかについて整理する。第1節ではジェンドリンの「体験過程」の成立について述べる。第2節では「感じられた意味」の機能を詳細に論じ、5つ目の機能である「把握 (comprehension)」に着目し、ジェンドリンの意味生成の理論を解説する。第3節では、ジェンドリンのデューイ解釈を踏まえ、新規的な意味の発見と創造が同時進行的に成立する側面を明らかに、デューイの「経験」について考察する。

1. ジェンドリンの「体験過程 (experiencing)」について

ジェンドリンは、「フォーカシング」を開発した臨床心理学者として有名であり、さらに哲学者として「暗在性の哲学」の創始者として知られている。本稿で言及する「体験過程」と「感じられた意味」は『体験過程と意味の創造—主観性への哲学的、心理学的アプローチ (*Experiencing and the Creation of Meaning: A Philosophical and Psychological Approach to the Subjective*), 1962 (以下『ECM』と略記)』で詳細に述べられており⁽⁴⁾、「暗在性の哲学」並びに「フォーカシング」の両方で使用され、ジェンドリンの根源語としての位置にある。この「体験過程」という着想は、カール・R・ロジャーズ (Rogers Carl R, 1902-1987) が主催する臨床心理学の研究所での経験が大きく影響しているとされてきた。国内におけるジェンドリンの研究は、臨床学的側面の研究が多く、「体験過程」は、臨床心理学者である村瀬孝雄氏が邦訳した⁽⁵⁾。田中秀男によれば、現在に至るまで、ジェンドリンの理論的業績が引き合いに出される村瀬の功績が大きいとされる。田中は、ジェンドリンの「体験過程」の成立とその系譜について詳細な論述をしているため、田中の研究に依拠しつつ、概要を見てみたい。

まず、ジェンドリンの哲学的背景には、ヴィルヘルム・デイルタイ (Wilhelm Dilthey, 1833-1911) の影響を受けていることが指摘されている。デイルタイは人文・社会科学に相当する学問を精神科学と定義し、自然科学の方法と異なる方法で、探究することを念頭に置いていた。精神科学においては、人間の有意味性が、従来の自然科学の認識方法で十分に捉えることができないが故に、より事象の直接的な側面を把握する概念を必要としたとする。ここからデイルタイは、対象そのものではなく、対象の成立条件を探究したと言えよう。例えば、自然科学では組成分析や解析を通して人間を探究するのに対し、精神科学では、人間がある対象と関わる場合、当人の主観的側面、感情、過去の「経験」を踏まえて成立していることから、そのアプローチを探究したと考えられる。田中によれば、デイルタイの功績の一例としては、それまでの、ドイツ哲学の用語として、「経験 (Erfahrung)」とは別に、「体験 (Erleben, Erlebnis)」という用語を定着させたことであるとしている。現在のドイツ語の名詞には、英語の名詞「experience」に当たるものが2種類あり、1つ目の「Erfahrung」は日本語で「経験」と訳されており、2つ目の「Erleben」あるいは「Erlebnis」は、「体験」と訳されているもので

ある。ドイツ語の「体験 (Erleben, Erlebnis)」は、「経験 (Erfahrung)」と比べた場合、より「直接的」な印象を与えているとされる。田中が指摘するように英語では、この2種類の概念に対応する概念が存在しない。それ故、「Erfahrung (経験)」の方を単に「experience」と訳し、「Erleben, Erlebnis (体験)」の方をまとめて「lived experience」と訳するのが定訳となっている⁽⁶⁾。ジェンドリンは「Mt.」の第3章「体験することと思考すること」において、ドイツ語の「Erleben」や「Erlebnis」を英訳し、独自の解釈（「体験過程」）を加えている。この章において「Erleben」は「過程ないしは働き (the process or function)」を示しているため、体験が流れるように進行するというニュアンスから、デイルタイの「Erleben」がジェンドリン独自の解釈で「experiencing」という進行形となり、彼の哲学の一元流になっていると推察される。

ジェンドリンは、修士論文を提出後の1952年にロジャーズの主催する臨床心理学の研究所にて研究を開始した。ジェンドリンは、クライアントが自分の言葉を紡ぎだそうと沈黙し、自らの内的な身体感覚に意識を焦点化することに、カウンセリングの成功の要因を見出した。ジェンドリンが臨床心理学で初めて執筆した「体験過程の特質とその変化 (“The qualities or dimensions of experiencing and their change”）」、1955において、「体験過程」の考察が行われている⁽⁷⁾。この時点では、デイルタイ哲学の影響は影を潜め、臨床心理学的観点と後に経験主義哲学への系統が読み取れるようになっていく。この論文では、自分では上手に言葉にならないが、身体的に感じられる暗黙の領域を「体験過程」としている。ジェンドリンは「体験過程」を、人間を環境との相互作用において絶えず進展し、変化しつつある「生命過程 (a living process)」と捉え、内的に受け取れる生命の恒常的で、常に現在において存在している根本的な現象であると述べている⁽⁸⁾。しかしながら、「体験過程」が概念として、自明性をもって定立することはなく、言語的なシンボル化を伴わない限りは、匿名的で顕在化されない。この意識化には、「感じられた意味」の使用によって初めて顕在化するとしている。特にデイルタイの哲学的考察では見られなかった点として、感情の作用に着目が大きく置かれている。こうした感情の作用に着目する姿勢は『ECM』においても同様であり、さらにこの「体験過程」を推進させる感情の側面として「感じられた意味」の機能性という考察とつながっていく。『ECM』で注意すべきは「experience」の解釈に必要なことである。『ECM』ではデイルタイの記述がほぼ見られず、むしろデューイに言及する箇所が多いため、文脈により、「体験 (Erleben)」なのか「経験 (experience)」なのかを注意して吟味する必要がある。例えば、以下のように述べられている箇所などである。

経験 (下線筆者)は、われわれがどのような瞬間にももっている感情の流れ (flow of feeling)、その一部ははっきり定まっていなような流れとして考えなければならない。それを私は「体験過程」と呼ぶことにし、望むなら、いつでも内的に触れていくことができる感情の流れを表す用語として使用する。⁽⁹⁾

下線部は原著の表記で「experience」なのだが、この引用の2段落前からジェンドリンは、プラグマティズムと論理実証主義の問題を指摘している。論理実証主義の観点のみで人間のあらゆる事象を決定づけることは困難であることから、ジェンドリンは、論理的に秩序づけられる以前の前概念的な「体験過程」の領域と論理的シンボルとの相互作用を考察する必要があることを訴えている。

上記の引用からも理解できるように、ジェンドリンは、概念に先立つ「体験過程」という次元と概念の相互作用関係を明らかにしようと試みている。思考には「体験過程」という感情の要素が概念形成において重要な役割を果たすことを示そうとしているのである。特に、「体験過程」は、前概念的で言語化に先立つ次元を含む。そして、「体験過程は、人間と環境との相互作用において絶えず進展し、変化しつつある「生命過程 (a living process)」という主張は、デューイの経験主義の文脈と重なりあうともいえよう。ジェンドリンは、デューイが経験について考察する際には、感情的な側面を重要視していることを取り上げ、その「感じ (feeling)」それ自体の機能性を「感じられた意味」として定義し、緻密な分析を行っている。特にこの「感じられた意味」はデューイの「示唆」の発生の過程を含むと主張していることから⁽¹⁰⁾、「感じられた意味」は、通常、観念が得られる源泉としての「示唆」の生起の過程、つまり暗黙裡として、言語や概念に先立つ前反省的な領域ではあるものの、何かが感じ取れる領域であることを踏まえ、その機能性を分析しているといえる。それゆえ次節ではこの機能性について考察する⁽¹¹⁾。

2. 「感じられた意味 (felt meaning)」における7つの機能性について

2-1 「感じられた意味 (felt meaning)」の平行的機能関係

本節では、先に述べた「感じられた意味」を考察する。ジェンドリンは新装版の『ECM』（1997）の序文で、「感じられた意味」という7つの機能性の発見は、特に重要であるとしている。この7つの機能は、平行的機能関係である1「直接照合 (direct reference)」, 2「再認 (recognition)」, 3「解明 (explication)」, と、創造的な非平行的機能的関係としての4「隠喩 (metaphor)」, 5「把握 (comprehension)」, 6「関連 (relevance)」, 7「言い回し (circumlocution)」が詳細に述べられている。本節では「把握」の機能には、ジェンドリンの独自性があるため詳細に考察したい。

「直接照合 (direct reference)」は、言語化以前の前概念的で身体的に感じ取れる「体験過程」に注意を向けることである。ジェンドリンは具体例として「民主主義は人民による政治である」という文章を例に用いている。この文章を読んだとき、民主主義という単語に何かしらの身体的な感情が生起するという。注意すべきは、民主主義を定義できるかは別にして、「民主主義というのは……」と言葉を発する際の前概念的な身体的な感じに着目するあり方を挙げている。別の事例としては、抽象絵画を鑑賞して、何と感想を言えばよいか言語化が困難だが、その有意味性に触れようとすることを「直接照合」と述べている⁽¹²⁾。

次に、「直接照合」に対応する形で、「再認 (recognition)」が生起する。「再認」は「直接照合」に対応する形で生起する。ここでは言語的なシンボルが単独で概念化できる状態で発生する。例えば、

「民主主義」という単語を書籍や論文の中で読んだとき、「民主主義」というシンボルだけでなく、そのシンボルによって「感じられた意味」が呼び起こされる。シンボルが「感じられた意味」を呼び起こさなければ、そのシンボルは意味を持たない。「再認」という機能は「感じられた意味」を呼び起こすことである。そしてシンボルによって呼び起こされる「感じられた意味」を「再認」と呼ぶ。「再認」とは、思い起こされた意味であり、「体験過程」における「感じられた意味」の再確認とも言える。「再認」する対象は「感じられた意味」であり、これは「直接照合」におけるシンボルの特定がなければ、存在しないものである。しかし、ジェンドリンが述べるように「感じられた意味」は、常に暗黙的に機能している。それ故に、存在していないにも関わらず存在している、という一見すると矛盾するというような事態になっている⁽¹³⁾。

「再認」の次に対応して生起するのが、「解明（explication）」である。平行的機能関係（説明がないから注で述べる）の最後である「解明」について、ジェンドリンの言葉を借りれば以下になる。「再認」では、シンボルはそれ自体として有意味であり、「感じられた意味」を呼び起こす機能である。その一方で「解明」は、「再認」によって呼び起こされた「感じられた意味」がさらにシンボル化を受けて、具体的に説明される。「再認」は「シンボルから感じられた意味」へと回帰したが、「解明」では「感じられた意味からシンボル」へと逆方向に向かうことになる。「解明」において、シンボルは「感じられた意味」を表現、描写、表象、概念化しようと機能する。「解明」における感情の働きとは、「直接照合」や「再認」における感情の働きとは違い、選択的に遂行されることである。例えば、民主主義という語を見る。（直接照合）、そのシンボルにより、我々に「感じられた意味」が呼び起こされる（再認）。民主主義を認識し、思考するのはこれで充分だが、民主主義というシンボルが我々に呼び起こしている「感じられた意味」に「直接照合」し、それをさらにシンボル化することで、なじみのある語を改めて定義することができるとしている。つまり、ジェンドリンは、この言葉が定義される過程を「解明」と呼ぶのである⁽¹⁴⁾。具体例を挙げれば、「民主主義」というなじみのある概念を定式化する命題について、一旦、「民主主義とは」という与件を口頭でつぶやくことで、認識の俎上に上げてから思いつく様々な過去の思想家の「民主主義」についての定義を選択し、その命題の結論を決定する過程を思い浮かべればよい⁽¹⁵⁾。

2-2 「感じられた意味（felt meaning）」の非平行的機能関係

平行的機能関係に対して、非平行的関係は、「感じられた意味」とシンボルとの間に差異が発生し、意味の認知と同時に新しい意味の理解と創造が行われる。特にジェンドリンは、思考が論理性だけに限定されず、飛躍する機能性を「感じられた意味」の「把握」の出現に見て取っている。以下で順番に確認してみたい。非並行的機能関係において、まずジェンドリンが着目するのは「隠喩（metaphor）」である。ジェンドリンは、「隠喩」において「私の恋人は赤いバラのようだ」という文章を用いてこの機能を説明している。「私の恋人は」、という主語に「感じられた意味」（再認）が起こり、「私の恋人は背が高い」（解明）といった事が思い起こされる。次に「真っ赤なバラのようだ」

という述語により、それまでとは違う「感じられた意味」が沸き起こる。これは平行的関係で述べられていた、ある方向性を指し示すという機能ではなく、自分でも思いもよらなかった側面、例えば「恋人は高貴で優雅だが、棘のあるために、その怖さゆえに近寄りがたさがある」といった比喩表現に新しい「感じられた意味」とその作用による新しいシンボルが引き起こされる⁽¹⁶⁾。

次に「把握 (comprehension)」について解説したい。「把握」は、「隠喩」で意味を創造した時の、整合性を確かめる上での発見的な可能性を指し示す役割を果たしている。例えば、詩人が自分の言いたいことを述べようと、まず「隠喩」において新しい意味を創造していく。その際、何度も新しい意味を創造し、自分にとって最も納得のいく概念を選別し、選択しようとする。「把握」は、この「隠喩」で創造された意味を精査し、概念の一致へと見出す機能があると同時に、概念の創造としての意味の変化としての飛躍が起きるという。先も見たように「隠喩」は、「解明」の時とは違い、新しい意味を創造する。しかし「隠喩」での創造それ自体には、創造された意味が自分にとって必ずしも「まさに、この表現にふさわしい」という一致へと至るわけではない。それゆえ、何度も新しい意味を創造しようとする。この「隠喩」で創出された意味が、自分の表現したかった意味への一致を可能にしているのが「把握」である。ジェンドリンによれば、「把握」では、「隠喩」で発した言語的シンボルが、その発話における過程でシンボル化されていなかった意味自体が変化させるとしている。ジェンドリンは以下の様に述べている。

我々は、他の人々にも自分の思っていることを伝えるためだけではなく、自分自身にも語るためにもシンボルを使うのです。⁽¹⁷⁾

上述の引用を具体的に説明すれば以下のようなになるだろう。例えば自分が他人に、自分の考えを述べている最中に、その時の自分の発言に対し「自分はそういうことを考えていたのか」という自己認知を得る「経験」のことである。その瞬間の自分の発言には、思いもよらない気づき、発見、新規的ともいえる何か新しい「感じ」が生起するだろう。この自己の発言に対する意味の獲得を選別しているのと同時に、新しい意味の創造を提供する機能が「把握」である。ジェンドリンによれば「把握」こそが、新しい意味が創造された判断基準として恣意性がなく審判者として機能すると述べている。さらにこうした飛躍しながら湧き出た感じとしての特徴は、同一的表現を発話し、担保しながら意味を変化させていると指摘する。というのも、自分の発言した表現に思いもよらなかった意味が生起しているからである。この特徴から、「感じられた意味」は概念化に先立つ次元にあるため、顕在化されないと同時に、シンボル化によって初めて顕在化される。それゆえ、「感じられた意味」の「把握」には「顕在化されないが、顕在化される」、という、相反する機能的特徴をもつ⁽¹⁸⁾。さて、「把握」では以下のことが言えよう。すなわち「隠喩」において、新しいシンボルを創造しつつ、「把握」がその「隠喩」における発言を審判するという機能性が存在している。「把握」の機能には超越的な到来性といった意味の審議判定と意味変化としての生成機能があるということになる。さらに平行的機

能関係と非平行的関係に着目すれば、「把握」によって一度新しい意味が形成された場合、その意味は平行的関係による「直接照合」、「再認」というカテゴリーで再度捉えることが可能である。このことから、平行的機能関係と非平行的機能関係も相互作用関係があることがわかる。

次に「関連（relevance）」だが、「関連」は、把握の成立条件に関わっている。我々は、過去の「経験」や「体験」、その時に会得した知識や情報、さらにはその都度変化する状況における対応方法が身体的に無意識的に内包している。「把握」におけるシンボルの審判的判定が沸き起こり生起しつつ、シンボルの意味変化が成される際に、その必要性に応じた関連における知識が無意識的に呼び起こされるという。例えば、「民主主義」について人が語りかけようとする場合、その語る相手が学生であるのか、それとも政治家であるのかによって、その紡ぎ出される言葉の意味が変化するであろう。はたまた政治的状況やそのトピックが目的とするテーマによっても、その成立条件は複雑に変化してくるはずである⁽¹⁹⁾。

最後の「言い回し（circumlocution）」は、ある語りが積み重ねられていく進行のステップがより明瞭になることを言う。先の関連が作用するということは、有意味な過去の体験が理解されることであり、語りの内容がさらに進展しやすくなる現象をジェンドリンは、「言い回し」と呼んでいる⁽²⁰⁾。

以上、簡略的だが「感じられた意味」の機能性について述べた。概念の使用が思考に関わるという事実は常識であるが、概念に先立つ「感じられた意味」が思考の根幹に関わっているということをジェンドリンは提示する。思考が論理性のみに依拠するというよりは、非平行的に機能している「感じられた意味」が思考の根幹を支えていると指摘されている。次節ではこの「感じられた意味」の機能性と「体験過程」の特質を踏まえうえて、ジェンドリンの視点からデューイの「経験」について考察する。

3. ジェンドリンのデューイの「経験」解釈に着目して

先述したジェンドリンの「体験過程」と「感じられた意味」の機能性から、ジェンドリンは、デューイの「経験」に関する見解に以下のような主張をしている。

これまで主張してきたことは、ベーコンやデューイの見解と違ったものではありません。ただ一つ違っているところは、我々が“経験”という概念を外にあるいは内的に観察可能な、直接与えられる体験過程の直接照合を含むように拡張したところだけです。⁽²¹⁾

ジェンドリンは、このように主張するが、「経験」が直接観察可能な「体験過程」と「感じられた意味」の「直接照合」を含むことは、「経験」にどのような意義をもたらすのかについては述べていない。それゆえ本節では、「経験」への意義を考察するにあたり、ジェンドリンが『ECM』でデューイの『思考の方法』（1933）から影響を受けていることから、反省的思考における「示唆（suggestion）」と「反省（reflection）」の機能における感情の言及を踏まえ考察する。

デューイは、『思考の方法』（1933）の思考に関する見解として、自動的で無統制であり、観念が脈絡なく発生すると主張し、思考の過程においては、「私が思考する（I think）」というよりは、「思考がなされる（It thinks）」といった考察から、思考は無統制であり「過程（process）」であると捉えている。この思考を知的に導くために、デューイは「示唆」と「反省」という二つの機能が関わっていることを指摘したのは周知のことであろう。「示唆」は、デューイの反省的思考を支えるうえでの起点であり、観念を得る意味での源泉である。デューイは、「示唆」は「胸の中に漂然として入ってくる⁽²²⁾」と述べている。それ故、示唆から得られた観念を概念へと高める反省的思考という過程に知性化が試みられており、反省的思考に示唆の発生の過程それ自体は、反省の枠組みに組み込まれてはいない⁽²³⁾。まず着目すべきは、「示唆」の出現には、過去の「経験」に触発されて発生すること、及び、感情の状況に依存することを指摘し、出現した「示唆」を躊躇なく採用するとしている点である。ジェンドリンは『思考の方法』（1933）から以下の箇所を引用している。

あらゆる推理作用は、観察か或は先行知識の回想かによって与えられる確実な既知の諸事実の彼方に及ぶという理由だけによって、「既知的存在から未知的存在の飛躍」を含んでいる。推理は観察され、ないしは、記憶される物事によって誘起される示唆を経て、または示唆を通じて行われるのである。……示唆は、自身の選択、願望、興味、または、その人の直接の感情の状況に依存する。示唆の不可避性、示唆が精神の前で飛躍する場合の活力、示唆が肯定させられ、あるいは、明らかに事実と矛盾しようとする自然的傾向、こうしたものは示唆の中に動く、必然的なものを示すのであり、この必然的なものが、人の信ずる推理の基礎である。⁽²⁴⁾

『思考の方法』（1933）では、「推理（inference）」の条件に「示唆」の出現が重要であると指摘されている。次に「示唆」の出現の条件を見てみると、「感情の状況（state of passion）」という何かしらの「感じ」が必要とされている。この「感情の状況」に関してデューイは多くを語らないのだが、ジェンドリンは、デューイの「示唆」の出現には「感じられた意味」の機能を含んでいると指摘している。それ故、「感じられた意味」が「感じ」を含むため、「示唆」の出現には、何かしらの「感じ」が含まれると考えられる。つまり、思考における「推論」には何かしらの「感じ」が重要であり、既知から未知への飛躍が不可欠であり、同様に「示唆」の出現にも飛躍の発生が関与し、この「示唆」の中に動く必然的なものが思考における「推理」の条件となっているのである。これらのことから、「示唆」の出現と「推理」の遂行に飛躍があり、「感じ」を起点としているのである。では、この必然的な物とは、どのように機能し、どのような意義があるのだろうか。デューイ自身は、この考察については明確に述べてはいない。故に、もう少しこの「示唆」と「反省」の関係について敷衍してみよう。先に述べたように、デューイによる思考は、自動的で無統制であり、「思考がなされる（It thinks）」といった見解からは、思考は流れるかのように進行する様相として捉えている。また、「『示唆』の生起を直接に左右するものは何もない⁽²⁵⁾」というデューイの言及からも明らかな様に、「経験」の再構

成において、相互作用関係にある連続的な経験の進行の内で、「示唆」の出現の過程それ自体は、考察の外に置かれているのである。それゆえ、あくまで「示唆」から得られた観念を「反省」することを提唱し、観念を点検・吟味し、論理的に明確に整理し、過去の「経験」から構成されている論理構造に位置づける必要性を説いている。このことは、「示唆」から「反省」がなされるという、「一がなされた」という意味で、「経験」の生成に「受動的（undergoing）」な関係が存在する⁽²⁶⁾。つまりは、観念を検証する際に、立ち止まり反省を行うことから、「経験された（experienced）」という成り方で遂行される。この思考の自動的で無統制な流れを踏まえて、藤井千春は、「示唆」と「反省」の極めて緻密な考察から、思考において、「自動的奔放に観念が湧出し変化している際に、同時に『反省』することは論理的に不可能である」と主張する⁽²⁷⁾。この指摘は極めて妥当であり、批判の余地はない。というのも「示唆」と「反省」というあくまで2つの機能関係の内で、思考の作用を考察しているためである。「反省」という機能に、振り返り戻るといふ内省が必要であるため、「示唆」が出現しながら反省を同時進行的に行うことは不可能である。

しかし、本稿の2節の「感じられた意味」の非平行的機能関係で示したように、「示唆」が出現する過程である「感じられた意味」での側面では、「把握」に示されているように、言語化に先立つ暗黙的に直観される感情（感じられた意味）が極めて精密に機能し、新しい意味が創造された際の判断基準として恣意性をもたない審判者として機能していると主張されている。結果として、「感じられた意味」の「把握」には、「示唆」の出現の瞬間と、その特徴として指摘されていた「示唆」の中に動く必然的なもの、つまり飛躍の到来性とそれによる意味変化が生起するといえよう。飛躍の到来性の瞬間こそは、既存の概念の意味をすべて変えるのではなく、新しい意味付与の側面が沸き上がる「感じ」をもつ。「示唆」の中に動く必然的なものには、「感じられた意味」の「把握」が推理の基準となり、デューイの主張に整合性を与えていると推察される。

そして最も重要なことは、この思考の側面こそは、言語化ないしは概念形成以前の「体験過程」と「感じられた意味」が相互作用関係の内で、意味の新規的な発見と創造が同時に進行しているのである。このことから、「反省」という機能が介在する以前に「感じられた意味」が起点となり、意味の発見と創造が同時に行われるという事実が明らかとなる。以上を踏まえれば、本節の最初で取り上げた、ジェンドリンがデューイの「経験」を「体験過程」の「直接照合」を含むと主張した姿勢が理解できよう。結果として、「経験」の枠組みに、デューイが明確に「経験」の構成要因として導入することが困難であった、言語化に先立つ次元である「感じ」を「感じられた意味」の機能として明らかにし、「経験」の構成要因として導入することで、同時進行的に意味生成ができる可能性が提唱されているのである。

では、こうした「示唆」の出現する、言語化以前の領域で、かつ同時進行的に意味の新規的な発見と創造が推進されるという思考の在り方は、教育にどのような意義を与えるのだろうか。例えば、現行の問題解決学習やアクティブラーニングにおいては、「示唆」と「反省」という活動が契機となっていることから、あくまで「反省」という「示唆」から得られた後に、観念を概念に高める活動を整

理する上では、一定の教育を行うことができる。しかし、「示唆」の湧出の方法、つまりは「示唆」が必然性をもって生じしえるような基準は、設定することが現状の経験主義教育では困難である。以上のことを踏まえるならば、本研究では、この「示唆」の出現の必然性がどのように生起するのかについて、ジェンドリンの「体験過程」と「感じられた意味」の機能的観点から、それまで認識不可能であった「示唆」の出現の過程に対し、「経験」を構成する探究可能性としての視座が与えられたと言えよう。

おわりに

本研究ではジェンドリンの「体験過程」と「感じられた意味」に関して「感じ (feeling)」の思想的経緯を踏まえ考察した。特に、これらの概念がデューイの「経験」の構成において着目していた「感じる」という側面をどのように明らかにしているのかについて、「感じられた意味」の機能性を踏まえ、デューイの『思考の方法』(1933)の観点から論じた。思考の操作や推論の条件に「感じ (feelings)」が関与していることは、デューイ自身も着目していたことは事実である。しかしながらこの領域は、前概念的で言語化に先立つことから、論じることすら困難な領域である。本研究では、ジェンドリンが、こうした前概念的で反省的な活動が行われる以前の領域を「体験過程」と「感じられた意味」の機能性をもって明らかにしていることを示した。また「感じられた意味」の「把握」がデューイの「示唆」の出現の過程を示し、この思考の在り方が、観念の到来と意味の獲得が同時進行的に行われていることを考察した。通常デューイも指摘するように「示唆」が出現する必然性を問うことは困難であり、原理的な考察は不可能とされている。しかしながら本研究の成果からは、「感じられた意味」の機能的観点から、この「示唆」の出現の必然性を探究できる可能性があることを明らかにした。以上を踏まえれば、ジェンドリンがデューイの「経験」を「体験過程」の「直接照合」を含むと主張した姿勢が理解できよう。つまりは、前概念的で言語に先立つ次元に「経験」として探究可能性としての視座を提供しているのである。

注(1) 田中秀男「ジェンドリンの初期体験過程理論に関する文献研究（上）—心理療法研究におけるディルタイ哲学からの影響」『明治大学図書館紀要』第8巻, 21頁。

(2) 三村尚彦著『体験を問いつける哲学 第1巻—初期ジェンドリン哲学と体験過程理論—』特定非営利法人 ratik, 2015年, 102-177頁。

(3) Johnson, Mark, *The Meaning of the Body: Aesthetics of human understanding*, University of Chicago, 2007, Press. pp. 78-85.

(4) Gendlin E. T., *Experiencing and the Creation of Meaning: A Philosophical and Psychological Approach to the Subjective*, New York: Free Press of Glencoe. 1962, Reprinted by Macmillan, 1970. (改訂版 Northwestern University Press, Evanston, Illinois, 1997) 邦訳は以下を参照した。ユージン・T・ジェンドリン著、筒井健雄訳『体験過程と意味の創造』ぶっく東京, 1993年。)

(5) ユージン・ジェンドリン著、村瀬孝雄訳『体験過程と心理療法』牧書店, 1966年。

(6) 田中、前掲論文, 9-13頁。

(7) Gendlin ET, Zimring F “The qualities or dimensions of experiencing and their change”. Counseling Center

Discussion Papers, 1955. p. 13.

- (8) Gendlin, *op. cit.*, p. 15.
- (9) Gendlin, *op. cit.*, p. 3.
- (10) *Ibid.*, p. 60 (筒井訳, 86 頁。)
- (11) ECM では 90 頁から 137 頁で詳細に論じられているが、三村尚彦も「感じられた意味」に関する詳細な論述を展開しているのでこちらも参照のこと。
- (12) Gendlin, *op. cit.*, pp. 91-100. (筒井訳, 118-126 頁。)
- (13) *Ibid.*, pp. 100-106. (筒井訳, 127-133 頁。)
- (14) *Ibid.*, pp. 106-111. (筒井訳, 133-138 頁。)
- (15) *Ibid.*, pp. 106-111. (筒井訳, 133-138 頁。)
- (16) *Ibid.*, pp. 113-117. (筒井訳, 140-144 頁。)
- (17) *Ibid.*, p. 120. (筒井訳, 147 頁。)
- (18) *Ibid.*, pp. 117-127. (筒井訳, 144-155 頁。「把握」の考察は三村, 前掲書, 150-152 頁を参照。
- (19) *Ibid.*, pp. 127-134. (筒井訳, 155-161 頁。)
- (20) *Ibid.*, pp. 134-137. (筒井訳, 144-164 頁。)
- (21) *Ibid.*, p. 212. (筒井訳, 240 頁。)
- (22) Dewey, john, *How We Think*, 1933, in *LW8*, p. 109
- (23) 藤井千春著『ジョン・デューイの経験主義哲学における思考論—知性的な思考の構造的解明—』早稲田大学出版会, 2010 年, 169-170 頁。
- (24) Dewey, *op. cit.*, p. 96. ここでの「感情の状況 (state of passion)」は「感じ (feeling)」とは違い、強めのニュアンスであり、概念の整合性も問題となるが、ジェンドリンは何千種類という、感情、「感情的陰影 (feeling tones)」や「感じられた意味」も含めて照合対象としての体験過程があることを指摘している。このことから、デューイの概念化された「感情の状況 (state of passion)」の背後にも「感じられた意味」があることは、ジェンドリンの考察の射程の中に含むといえよう。
- (25) Dewey, *op. cit.*, p. 96
- (26) Dewey, john, *Democracy and Education*, 1916, in *MW*, p. 163.
Dewey, john., *Art as Experience*, 1934, in *LW10*. p. 41. 両方の原著でも経験は「受動的 (undergoing)」な側面があると指摘されているため、本研究ではこの概念を採用する。
- (27) 藤井, 前掲書, 266 頁。